

## 「7日間ブックカバーチャレンジ」

(2020.5.9~2020.5.15 Facebook 上に投稿したものを加筆修正)

佐々木真理

第1日目(2020.5.9)

中勤助『銀の匙』(岩波書店、1935)



フランス語のテキストを読む会でお世話になっている  
広島大学名誉教授の原野昇先生からバトンを受け取  
りました。

とりあえず最初は指名無しで投稿します。

「銀の匙」中勤助

確か大学生の時だったか、父から紹介されて読みま  
した。

子供の頃の大切な思いが宝箱のように納められてい  
て、以来私の大事な本になりました。

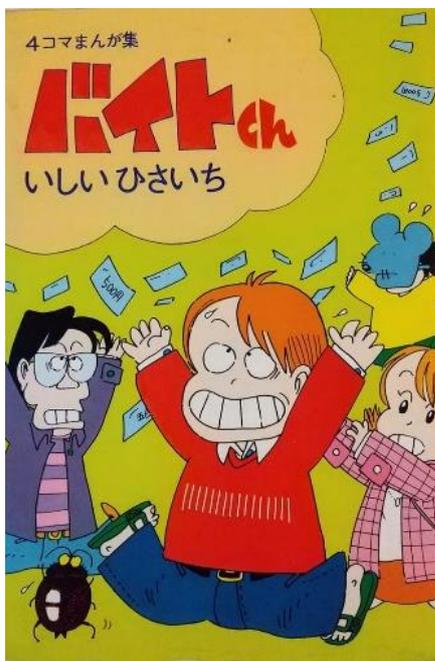
後日その同じ著者が、「犬」という恐ろしい作品を書  
いていたことに衝撃を受けました。

しかしその「犬」を、私の大好きな佐藤優さんが推薦  
されていたことを知り、人間の欲望を掘り下げた名作

なのだと思います。(気持ち悪いけど、こちらの方が名作という人多いです)

第 2 日目(2020.5.10)

いしいひさいち『4コマまんが集 バイトくん』(プレイガイドジャーナル社、1977)



前回、子供の頃大切に感じていたことを美しく表してくれた本「銀の匙」について書いていたら、同著者による「犬」の話になって、キラキラ感情から、まさかのドロドロ世界へ踏み込んでしまいました。

そこで今回はワハハハな本が良いなと思い、選んだのは、「バイトくん」です。

コミックでも良いのかな？

高校 3 年生という大事な時に友人に「良い物あるで」と紹介されて以来はまり、大学を卒業するまで、いしいひさいち氏のコミックを買い込んでいました。

バイトくんのアホさ加減に爆笑し、いしいひさいちさんの笑いのツボに首だけでなく、足だけでなく、全身突っ込み、心がしんどく笑いたい時には持ってこいの漫画です。

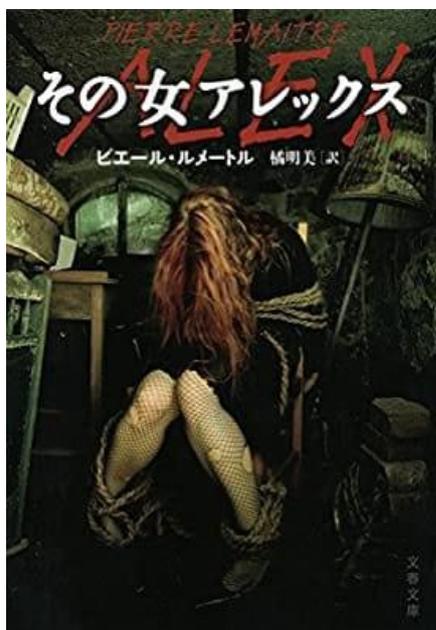
パロディーも茶目っ気たっぷり、スヌーピーのピーナッツブックスのパロディーで、ドーナッツブックスというシリーズもあります。ピーナッツブックス同様に各々タイトルが付いているのですが、それが世界の名作のパロディーに成っていて、これがまた秀逸。ちなみに、ピーナッツブックスは 24 冊、ドーナッツブックスは 17 冊持っていて、冊数ではピーナッツブックスの方に軍配が上がりました。

バイトくんのアホさ加減に爆笑し、スヌーピーの愛らしさにホッコリしたので、次回はまたどんよりした本をアップしようかな。



第3日目(2020.5.11)

ピエール・ルメートル『その女アレックス』訳: 橘明美 (文藝春秋、2014)



前回笑ったので、今回は.....

この本を読んだ時あまりにも衝撃を受けたので、実は2016年3月にFBにそのことについて投稿しています。

読み始めてすぐ、あ、これ読めないヤツ.....汚ない描写.....ダメダメ.....と思いながらも、すぐに飲み込まれ、もう止まらない徹夜コースとなりました。

早いうちに犯人は分かっちゃうんだけど、動機が分からなくて、ページをめくる自分の指の遅さにイライラし、何でもっと速読を極めておかなかったんだ！と後悔すらしそうなくらい早く読んでしまいましたかったのです。最後は、「アレックス————！良かったね！良くやった！でもアレックスは.....(ネタバレになるので伏せる)」と号泣😭😭😭😭 更に、刑事(名前忘れた😓

「悲しみのイレーヌ」のあの警部の最後のセリフに、「やっぱりそうだったんよね！カッコイイ————！」とまたまた号泣😭😭😭😭

それにしても、アレックスといい、ソフィー(同著者による「死のドレスを花婿に」の主人公)といい、主人公の女性は、こんな不条理な犯罪に巻き込まれたというのに、なんとメンタル強いことか！メンタル弱弱の私は、小説の中のこととはいえ尊敬❤️ターミネーターのあのお母ちゃんもチャーリーズ・エンジェルも尊敬❤️小林多喜二の母君に至っては事実だけに尊敬❤️礼拝❤️神❤️ あ、道が逸れた。

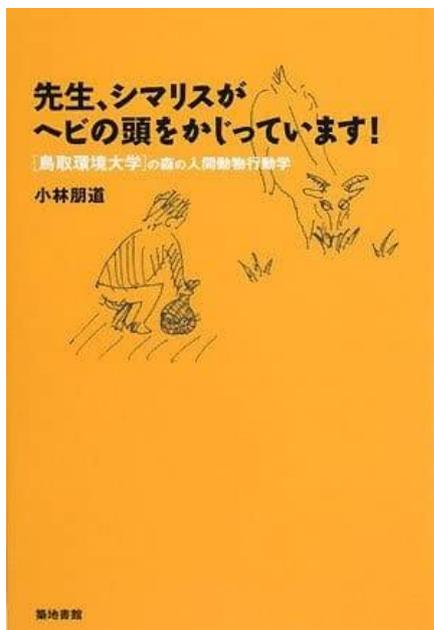
そしていつものパターンで作者ルメートルにはまって(でもアレックスが1番)、その後犯罪小説に手を出し、「凶悪:ある死刑囚の告発」(ドキュメント!)を読んだのですが、こ...これは...事実だけに...まじ事実なんだ...恐ろしくて体が震えました。あまりに恐ろしすぎ、犯罪小説はひとまず止めましたとき。私、メンタル弱すぎ。

今回、このチャレンジのバトンを、私の昔の職場(広島YMCA)でお世話になった同い年ながら私がとても尊敬している大下桐子さんに渡します。

第4日目(2020.5.12)

## 小林朋道『先生、シマリスがヘビの頭をかじっています！』

鳥取環境大学の森の人間動物行動学』（築地書館、2008）



図書館でブラブラして見つけました。

1990年代に、小林先生が、シベリアリスが冬眠などで動かない状態のヘビの体表を齧り取って自分の体に塗りつけることで身を守ることを発見されたんだそうです！SSAと名付けられたそうです。

これ凄いですよね！リス命がけですよ。（先生がおっしゃるには本能だそうです）

逆に、冬眠中って何されても目覚めないことにもビックリしました。

でもヘビの臭い付けたら同類のリスからも避けられたりしないのかな？繁殖期だけはSSAしないのかな？この「先生、〇〇！」シリーズは10巻くらい出されています。どれも魅力的です。

私が生物系の本に興味を持ったのは、「動物紳士

録」西丸震哉(中央公論社1973)からかと記憶しています。私が理科の師匠と呼んでいるKさんに西丸さんの話をしたら、もちろん知っていて、何冊か更に教えてくれました。Kさんと歩いていると楽しいのです。「あ、佐々木さん、これ見て！」と度々足を止めて、しゃがみこんで地面を観ることになるのです。生物好きな人って毎日愉しそうだなぁと感じたものです。

その後私はゲッチョこと盛口満さんの本に出会います。

気持ちがネガティブになっていた時にたまたま手に取り、癒されて前向きになれました。何故この本(「ゲッチョ先生の博物館 貝殻編 ぼくは貝の夢をみる」アリス館)で前向きになれたのか謎なのですが、これも出会い！片っ端から盛口さんの本を読むうちにはまり、とうとうファンレターまで書いてしまいました。そうしたらなんと！まさかの！返信をくださり(聞け！若人よ！手紙だ！直筆だ！)、ドンドンとゲッチョワールドに深入りしていきました。盛口さんの、子供に寄り添う姿勢も好きです。

最近では、川上和人さんの「鳥類学者だからって鳥が好きだと思うなよ。」(新潮社)も面白かったです。多分私は本の内容はもちろんですが、川上さんの文章が好きなのかもしれないと感じます。同じ臭いを森見登美彦さんの本からも感じるのだけど。

ああ、生物の本(専門書ではないが)について書いていたら、田中修先生の植物の本についてもアップしたくなるではないですか。たまたま運転中にラジオで「夏休み子供相談室」を聞いていたら、田中先生が、子供の無邪気な質問に対して真実をズバッと回答されて

いて、驚くやらウケるやら！相手が子供であっても、一生懸命専門用語から知識から伝えようとされていて、相当面白かったです。以来、夏休み子供相談室が楽しみになりました。

ブックカバーチャレンジなのだから、表紙だけアップしていれば良いものを、心を揺さぶられた本についてはつい力が入ってしまって、ついついダラダラと書いてしまい申し訳ありません。

ま、ここまで読んだ人はそう居ないだろうから、ハイッ！今日はこれでオシマイ！

あ、「バッタを倒しにアフリカへ」前野ウルド浩太郎も読みたい！

7日間ブックカバーチャレンジのバトンを、小平茂幸君に渡します。私が以前、ネット学習のサポートの仕事をしていた時の、私の担当ではなかったけれど生徒さんでした。交流会で出会って、そのお人柄に触れ、FBを通じて今でも交流させていただいています。くれぐれ無理のないようにお願いしますね。

第 5 日目(2020.5.13)

和田誠『倫敦巴里』(話の特集刊、1977)



私は友人に恵まれています、その中に、本や漫画を頼みもしないのに貸し出してくれる有難い友人が2人います。しかも私が好みそうなものを、「これ、好きじゃろ?」と言わんばかりに持ってきてくれます。ハイッ! その通り! この手の本、好物です!!

「倫敦巴里」は、その一人 Y さんが持ってきてくれました。Y さんの思う壺。いたくいたく気に入らして買うことに決め、調べたらまさかの絶版(泣) 中古で1冊だけ残っていたのを値は上がっていたけれど購入しました。それ程気に入ったのです。しかし今調べてみたら、未収録作を加えて「もう一度 倫敦巴里」として復刻していました! やはり伝説的名著なんですね。読めば分かります。

この本は、文学、絵画、映画など芸術のパロディー集という感じでしょうか。学生時代にはまっていた「ビックリハウス」を思い出します。私はパロディー好きなんですね。

さてこの「倫敦巴里」で、『世界(日本も含め)の著名な映画作家たちが、イソップの寓話“兎と亀”をテーマに映画を作ったらどうなるか』というのがある、これが優れものなのです。その“兎と亀”の脚本を読んだら、誰の作品か分っちゃうのですから。特に笑ったのは、イングマル・ベルイマン。すぐに「第七の封印」のあの悪魔がモノクロで浮かんできました。これの文学編もあって、例えば井上ひさしが川端康成の「雪国」を書いたらどうなるか? というのもあります。こちらもなるほど! と唸ります。

Y さん、ありがとう。こんな凄い本を教えてください。

第 6 日目(2020.5.14)

荒俣宏『世界大博物図鑑』全 5 巻 (平凡社、1991)



今から 30 年近く前横浜に住んでいましたが、その時神田の古本屋で見つけて夫と意気投合し、大枚はたいて買いました。

ここで注目したいのは、荒俣宏『著』だということです。『監修』ではないのです。

博物図鑑なので、架空のものや伝説上のもの、絵画など、ありとあらゆるものが掲載されています。例えば蟲類(虫ではないところにも一家言)には、「腹の虫」さえも載っています。昔の人が未知のものとして描いたもの)や名画(例えば高橋由一の“鯉”)も載っています。何もかも載っています。まさに「大博物」です。

そしてその図版の美しいこと！我家の子供たちは、この美しくも奇怪な図版によく見入っていました。そんなわけでどの図鑑も表紙はボロボロです。

印象に残っているのが魚類の中の「マンボウ」です。人がマンボウを食べるかどうかのケーススタディが書かれています。1813 年名古屋の石積船が江戸から帰航の途中に遭難し 480 日間漂流し続け、1815 年に英国船に救助されます。その救助された乗組員たちの話が書かれています。空腹の乗組員たちが漂流中にマンボウを見つけ、久しぶりの獲物！と喜び獲ろうとします。しかしマンボウがその丸く小さな目で自分たちを見つめるのを見て哀れに思い、放してやったという話が記録に残っているそうです。あのつぶらな瞳.....攻撃性皆無のあの姿.....分かるわあ.....

では今回この「ブックカバーチャレンジ」のバトンを、河田一久さんに渡します。河田くんとは、悪名高き N 中学校時代のクラスメートです。ちょっと彼の頭の中を覗いてみたいと思いました。

第7日目(2020.5.15)

佐々涼子『エンド・オブ・ライフ』（集英社インターナショナル、2020）



一番最近読んだ本。

題名の通り、終末期のあり方を考えるノンフィクションです。

私は小さい頃から死について考えることがよくあったけど、実は考えていたのではなく、思っていただけなのだ気付かされ、猛省しました。

「生きたようにしか最期を迎えられない」「人間は意味のない不運に耐えられない」「私たちは見たいようにしか他人を見ていない。家族においては尚更だ」「努力が報われない理不尽に対する怒り」など、たくさんの示唆に富む言葉がありました。

私が言葉にすると軽くなりそうなので、今回はダラダラか書くまい。

佐々さんの「エンジェルフライト 国際霊柩送還士」も

読んでみたい。霊柩送還士でふと、もっくんこと本木雅弘さんの「おくりびと」を思い出しました。素晴らしい映画でした。あの「シブがき隊」のもっくんが、こんなに上手い演技するんだ！とビックリしました。

「おくりびと」は、もっくんが納棺師という仕事に感銘を受け、自ら会いに行き、納棺師についての映画を作りたいと自らプロデュースしたということを知りました。もっくんの演技が冴え渡っていたことに納得がきました。そして今、ドラマなどで彼が自分の演技についていつも納得がいなくて悩んでいるとのことなのですが、それはやはり納棺師の時の一心同体感を得るに至らないからではないかと思いました。

また話が逸れて、結局長々と書いてしまいました。が、「7日間ブックカバーチャレンジ」が今回で最終回にたどり着きました。やってみると意外に楽しくて、毎回つついダラダラと書いてしまいました。

反省というかお詫びがひとつあります。自粛生活の楽しみにということで始まったらしいこの企画を、私はメチャクチャ忙しい上に昨年お子さんが生まれて更に多忙な毎日を送っている人にバトンを渡してしまったことです。かつて彼はFBで読んだ本を次々アップしていて、それらがとても興味深く、私も何冊か読ませてもらいました。それでつつい……それなのにバトンを受け取ってくれてありがとう。

ということで、皆さまお付き合いいただきありがとうございました。書く作業も、他の方の紹介された本を見るのも楽しゅうございました。私がバトンを渡した3人の方の本をしばらく味わいます。